

あった。

これまで、渡邊教授は沖縄県東村におけるフィールドワークからさまざまな研究上のフレームワークを生み出してきた。1990年代に提唱された民俗知識論はその代表的なものであったが、例えば、その中で語られたエミックとエティックの枠組みは、今回提唱された接続性の議論のなかで、発展的に統合される可能性を示している。すなわち、このことは二項対立の関係から異質原理の併存に至る幽径であり、研究者と調査地の接続性の問題が、新たな文化の統合理論を生み出す淵源に発展する潜在性を保持しているということである。

自己に対する反省的視線を失うことは、現地調査を行う人類学者にとっては致命的であることは言うまでもないが、決して人類学上の学問的評価と調査地からの評価が両立しないわけではなく、むしろ統合可能であることを、渡邊教授が示した浩瀚な事例研究から推認することができるのである。提示された数々の視点は、明らかに人類学調査の新たな定式であり、フィールドを志す北海道の次世代の人類学者に対して、その学問的可能性を拓ける道標となりうるものであっただろう。

(おかにわ・よしゆき／帯広大谷短期大学)

### あべ弘士氏講演会

(2005年度第2回日本文化人類学会北海道地区懇談会、北海道民族学会 共催)

津 曲 敏 郎

開催日：2006年3月28日

開催場所：旭川こども富貴堂

演題：「北方の人と動物」

講師：あべ弘士（絵本作家）

講師のあべ弘士氏は旭川在住の著名な絵本作家である。今、話題の旭山動物園で25年間に渡り、飼育係として勤めた経験をいかし、動物をテーマにした作品で知られている。今回の講演会では、動物園のウラ側をユーモラスな語り口で紹介しながら、特に動物のコミュニケーションの実例をわかりやすく話し、また動物の「コトバ」をまじえた絵本の読み聞かせも行った。後半には一昨年、昨年と続けて訪れたロシア沿海州ビキン川流域の人と動物について、写真を提示しながら解説した。当日は小学生から一般市民、研究者まで幅広い層の聴衆30名ほどが、旭川市中心部の児童書専門店「こども富貴堂」2階の広間で、和気あいあいとした雰囲気の中、おおいに氏の話を楽しんだ。

動物のコミュニケーション活動の手段としては、まず鳴き声あげられる。動物園のオオカミがある種の人間の声、特に園内アナウンスや神主の祝詞に反応して遠吠えをしたという例が示された。しかし鳴き声を発することは、敵にも存在を知らせることになるため、多くの動物では嗅覚がより重要なはたらきをするという。臭いで敵や仲間の存在を察知したり、自分の縄張りを宣言したりするばかりでなく、ときにはスカンクのように敵を威嚇し、遠ざけるために

臭いを発するものもある。ちなみに氏の挿し絵でベストセラーとなった『あらしのよるに』は、暗闇の中で互いの正体がわからないオオカミとヤギの間に友情がめばえるという設定であるが、嗅覚の鋭い（しかも夜行性で暗闇でも見える）動物にとって、現実にはありえない、という打ち明け話も披露された。

そもそも絵本の世界では、動物が人間のことばで会話することが暗黙の了解となっており、鳴き声そのものによって意味を伝えようとしたような例はまれである。そんな中で、ゴリラの鳴き声をふんだんに文字化したユニークな絵本として、『ゴリラとあかいぼうし』（山極寿一作、福音館書店 2002）がある。著者の山極氏は京都大学霊長類研究所を経て、現在、同大学院理学研究科教授、まさに「ゴリラ語」の第一人者である。ただし文字で「ぐっ ぐううむ」「ぐふぐふっ ぐごっ」などと示してあっても（そこから子どもたちが自由に想像力を広げることにはできるが）、実際に再現してみせることは至難のわざであろう。その意味で当日のあべ氏による読み聞かせは得がたい実演であった。氏が山極氏とともに制作した近刊予定の『ゴリラのこどもとあそんだよ』（絵と日本語 あべ弘士、「ゴリラ語」と解説 山極寿一）も特別に披露された。霊長類研究の最新の成果が児童文学に取り入れられ、このようなかたちで公表されていることは、報告者（津曲）にとって新鮮な驚きであり、あべ氏の朗読で聴衆にも動物のコミュニケーション活動の豊かさと奥深さがいきいきと伝わったに違いない。

続いて、ロシア沿海州ビキン川ツアーの様子が、旭川在住の写真家、今津秀邦氏撮影の写真で紹介された。当日は今津氏はじめ、このツアー・メンバーの多くが参加していた。川と森に拠って、今も狩猟を重要な生業とするウデへ族と動物とのかかわりが示された。またこれをテーマにした絵本『鹿よ おれの兄弟よ』（神沢利子作、福音館書店 2004）も紹介された。こうした機会をとおして、ウデへ等の少数民族について、子どもたちを含む市民レベルで認識と共感が広まることは、民族学の裾野を広げることにつながるとともに、当の少数民族自身にとっても、伝統文化と固有言語を見直すうえで大きな意味がある。研究者としても専門分野や対象民族の「広報」活動は重要であるが、あべ氏のような人材があいだに立ってくれることの影響力はきわめて大きい。今回の講演会のねらいもそこにあった。多忙な中、学会としての依頼をこころよく引き受けてくださったあべ氏に感謝したい。

また今回は札幌を離れて旭川での実施であったが、「こども富貴堂」が地域の文化サロンとしての役割を果たしていることを再認識する結果ともなった。同店の全面的なご協力にも謝意を表すものである。

なお、あべ氏がさまざまな動物たちに寄せる思いを語った最新刊に『あべ弘士どうぶつ友情辞典』（クレヨンハウス 2005）があるので、当日の話聞きそなたの方や、これに触発されてもっと知りたい方にお薦めしたい。

（つ magari・としろう／北海道大学）



あべ弘士氏